

一 若人<sup>にやくにん</sup>不信<sup>ふしん</sup> 毀謗<sup>きぼう</sup>此經<sup>しきやう</sup> 則斷<sup>そくだん</sup>一切<sup>いっさい</sup> 世間<sup>せけん</sup>仏種<sup>ぶつしゆ</sup>の事

仰せに云はく、此の經文の意は、小善の成仏を信ぜずんば一切世間の仏種を断ずと云ふ事なり。文句の五に云はく「今の經に小善成仏を明かせり。此は縁因を取って仏種と為す。若し小善の成仏を信ぜずんば、則ち一切世間の仏種を断ず」と。爾前經の心は小善の成仏を明かさざるなり。法華經の意は一華一香の小善も法華經に歸すれば大善と成る。縦ひ法界に充滿せる大善なりとも、此の經に値はずんば善根とは成らず。譬へば諸の河水大海へ入りぬればうしほの味と成る。入らざれば本の水なり。法界の善根も法華經へ歸入せざれば善根とは成らざるなり。されば釈に云はく「断一切仏種とは、淨名には煩惱を以て如来の種と為す。此境界性<sup>きやうがいしやう</sup>を取るなり」と。此の釈の心なれば、淨名經<sup>じやうみやうきやう</sup>の意は我等衆生<sup>な</sup>の一日一夜に作す所の罪業<sup>ざいごう</sup>、八億四千の念慮を起こす。余經の心は皆三途<sup>さんず</sup>の業因と説けり。法華經の心は此の業因即ち仏ぞと明かせり。されば煩惱を以て如来の種子とすと云ふは此の義なり。此の淨名經の文は正しく文在爾前・義在法華の意なり。此の境界性と云ふは末師釈する時、能生煩惱名境界性と判ぜり。我等衆生の眼耳等の六根<sup>もろしゆう</sup>に妄執<sup>もうしゆう</sup>を起こすなり。是を境界性と云へり。権教の意は此の念慮を捨てよと説けり。法華經の心は此の境界性の外に三因仏性の種子なし。是則ち三身円満の仏果を成ずべき種性なりと説けり。此の種性を権教を信ずる人は之を知らず。此の經を謗するが故に凡夫即極の義をも知らず。故に一切世間の仏種を断ずるなり。されば六道の衆生も三因仏性を具足して、終に三身円満の尊容を顯はすべき処に、此の經を誹謗するが故に六道の仏種をも断ずるなり。されば妙樂大師云はく「此の經は遍<sup>あまね</sup>く六道の仏種を開す。若し斯<sup>こ</sup>の經を謗せば義断に当たるなり」と。所詮日蓮が意は一切の言は十界を指す。此の經を謗するは十界の仏種を断ずるなり。されば誹謗<sup>ひぼう</sup>の二字を大論に云はく「口に謗<sup>そし</sup>るを誹と言ひ、心に背くを謗と云ふ」と。仍<sup>よ</sup>つて色心三業に經て法華經を謗し奉る人は入阿鼻獄疑<sup>にゆうあびごく</sup>ひ無きなり。所謂弘法・慈覺・智証・善導・法然・達磨等の大謗法の者なり。今日蓮等の類南無妙法蓮華經と唱へ奉るは、豈三世<sup>あに</sup>の諸仏の仏種<sup>つ</sup>を継ぐ者に非ずや云云。